

コロナ禍で促進された高齢者の特性を捉えるための学内実
習プログラム —「INTO 特養」 開発と実施—

Development and implementation of an on-campus training program to capture the characteristics of the elderly promoted by the corona disaster-Development and implementation of "INTO special nursing home"-

沢田淳子, 徳永しほ, 成澤健, 大橋幸恵, 出貝裕子, 大塚真理子

Atsuko Sawada, Shiho Tokunaga, Ken Narisawa, Yukie Ohashi, Yuko Degai, and Mariko Otsuka.

宮城大学看護学群

School of Nursing, Miyagi University

【キーワード】

老年看護学実習, コロナ禍, 学内実習プログラムの開発, INTO 特養, 高齢者の特性

Gerontological nursing practice, COVID-19 pandemic, Development of On-Campus Training Program, INTO Intensive Care Homes for the Elderly, Characteristics of Elderly People

【Correspondence】

沢田淳子
宮城大学看護学群
sawadaa@myu.ac.jp

【COI】

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

Received 2021.6.10

Accepted 2021.8.9

Abstract

Alongside changes introduced in the types of practical training due to the COVID-19 pandemic, the on-campus training program "INTO Intensive Care Homes for the Elderly" was developed.

This paper reviews and reports on teacher approaches associated with the creation of this program, which was triggered by the pandemic, and student learning attainment as observed by teachers.

At the time of development, teacher approaches included [citing episodes that frequently occur among the elderly] and [choosing contents and words that consider diverse life plans], while approaches during implementation included [ways to interview students for sharing one's self-image]. Approaches for student reflection included [supporting detailed cogitation in terms of scenes and emotions] and [supporting students so that they can connect their experiences at the INTO Special Care Home for the Elderly with nursing in the field].

Student learnings observed by teachers included [considering the individuality of the elderly based on comparisons with others] and [acknowledging and understanding the importance of nurses' support during decision-making].

In their reflections after the training, students described the process until moving into the special care home as their story along with their feelings at different points in time. This prompted all teachers to conclude that the "INTO Intensive Care Homes for the Elderly" had stimulated student learning. This program, which was developed because of the difficulty in carrying out practical training at special care homes as a result of the pandemic, was not simply simulated physical experiences of the elderly but included experiences of the stories of the elderly and it likely helped expand the students' views on nursing and the elderly.

Challenges included ways to boost teachers' ability to encourage student reflection and expression as well as sharing approaches among teachers. It is also necessary to analyze the contents of learning from the students' records and use the results for future development.

はじめに

2020 年は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から特別養護老人ホーム（以下、特養）での対象特性実習が中止となり、老年看護学実習の目的の 1 つである、高齢者が生活する多様な場やそこに生活する高齢者の特徴とその家族への理解、必要な看護の考察が難しいと考えられた。老年看護学では、高齢者をどの様に理解するかという「対象論」と、対象者に働きかける「方法論」により、質の高い実践を導くことを目指している [1]。また、高齢者観（イメージ）は、老年看護に携わる看護職者の看護に取り組む姿勢を形成する源となり、看護の質・内容に影響を及ぼす [2]。そのため、学生が今後、質の高い老年看護実践を行う看護師へと成長するためには、多様な高齢者の思いやあり方を理解して、高齢者観を拡大することが必要である。

高齢者の心情の理解に向けた教材として、佐藤らが開発したシミュレーションゲーム [3] がある。このゲームは、生活出来事カードを引きながら老年期の様々な身体・精神能力の低下、他者に依存する過程への遭遇など、不確実性の高い要素を疑似体験して理解する方法である。

今回これらを参考に、コロナ禍における学内実習プログラムとして、「INTO 特養」を開発、実施した。「INTO 特養」は、老いの過程の中で、様々な状況によって自宅ではない終の住処である特養に入居することになった、高齢者のプロセスやその時々の身体・心情の変化を学生が体験し、必要な支援を考えるために開発したものである。

本稿では、プログラム目標の達成に向けた「INTO 特養」の実際と工夫を報告し、教員の視点から学生の学習到達について振り返る。

目的

老年看護学実習の一部に位置づけた、対象特性実習の実習形態変更に伴い開発、実施した学内実習プログラム「INTO 特養」について、本プログラムの目標達成に向けた工夫と実際を報告し、教員が捉えた学生の学習到達について振り返る。

表 1 対象特性実習の目標および「INTO 特養」のねらい

対象特性実習目標

1. 高齢者が療養生活している施設について説明できる。
高齢者が療養生活している施設の設置主体・法的な位置づけ・設置基準と利用対象者の条件、施設や看護部の理念・方針・目標、看護・介護の提供体制、看護の役割や機能を説明できる。
2. 施設で生活をしている高齢者とその家族について理解できる。

「INTO 特養」のねらい

高齢者特有の身体・心理・社会的変化を疑似体験しながら、特別養護老人ホームに入居するまでの過程を体験し、人生の最晩年を特養で暮らす高齢者について考えることができる。

以下のカード(合計11枚)をタスキ(2本)に付けた状態で開始する

- 白カード(2枚)** 何歳まで生きたいか考えてもらい
①そこから-10歳の年齢と、呼ばれたい名前×1枚
②その時住んでいた居場所と住居の形態など×1枚
- 黄色カード(1枚)**
③その時の仕事、やっていたいこと×1枚
- 桃カード(1枚)**
④その時の自己のイメージ×5枚
- 緑カード(1枚)**
⑤その時に持っていたい物×3枚

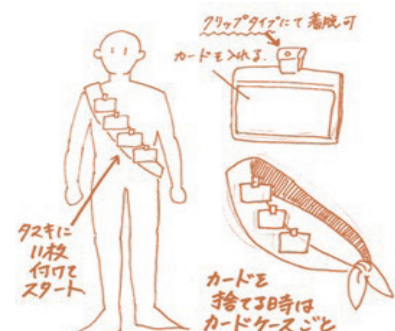


図 1 学生の演習スタイル

「INTO 特養」の概要

本学老年看護学実習における対象特性実習の目標および「INTO 特養」のねらいを表1に示す。「INTO 特養」は高齢者役と介助者兼観察者役の学生が2人1組となり実施した。高齢者役は自分が何歳まで生きるか想像し、そこからマイナス10歳の現在、誰とどこに住み、何を大切にどの様に生活しているかをイメージしてカードに記載し、それを身に付けた(図1)。その後、図2のような会場内で、特養へ入居するまでの多様な偶然を疑似体験した。疑似体験は、様々な「出来事カード(表2)」を引きながら進められた。「出来事カード」の内容は、病気や配偶者の喪失など、マイナスと捉えられることや自身の能力をボランティアで活用するなど、プラスと捉えられること、選択が可能な内容や自身での選択が不可能な内容などであった。これらをゲームとして行うことで、老年期の身体変化や突然の疾患発症、大切な人との突然の別れという、運命的偶然性の要素を活用できる。また、予期しない出来事への不安や喜びの感情体験ができる。加えて、ゲーム内での感情体験を現実の感情と分けて振り返ることができる(トラウマ体験を妨げる)というメリットがある。

体験終了後学生は、時々の感情について、グループメンバー・教員とともにリフレクションを実施した。そして、高齢者が特養に入居前・後にどのような支援があれば自分らしい豊かな生活を送ることができるか考察した。

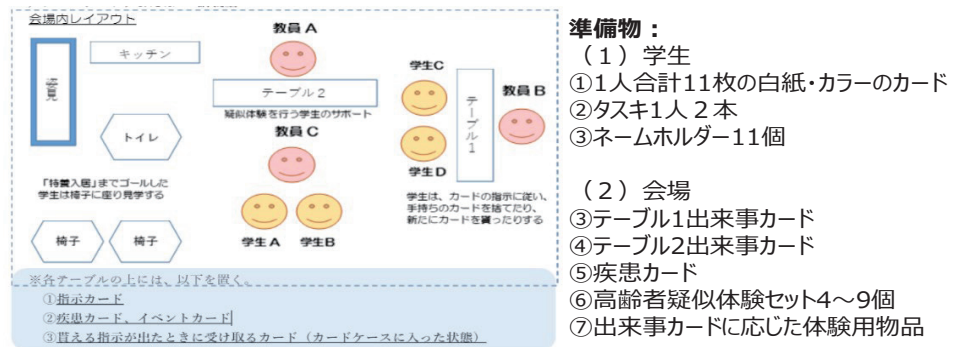


図2 会場のレイアウト

データ収集方法

学内実習プログラム「INTO 特養」を開発、実施した教員6名から、INTO 特養にまつわる実際と課題として、1) プログラム開発時の苦労や工夫、2) 実施中の苦労や工夫、3) 学生のリフレクションでの苦労や工夫、4) 今後改善したい(改善が必要と思われる)点について、書面および口頭で意見を得た。また、このプログラムは学生の学びにつながったか、および、学生の学びにつながったと考える理由や学びの内容について意見を得た。

倫理的配慮

本内容は教育実践報告であり、実践した教育を教員が振り返ったものである。授業運営を行った看護学教員と報告者はともに同一の教員であり、教員間で話し合い本取り組みをまとめ、公表することに合意している。また、検討内容や教育内容が教員として評価されるものではないことを確認している。加えて、意見を集約する際には、個人が特定されないように無記名で行った。また、学生に帰属する情報は本報告では用いず、学生の個人情報とは取り扱わないものとした。

表 2 出来事内容と指示内容の例

出来事内容	指示内容
いきいきサークルの体操教室に 2 年通っています。小さな脳梗塞のため足が上がりにくかったのですが、最近足は足の動きが前より良く、上がりやすくなったと感じています。	高齢者疑似体験の足の重りをつけて足踏み 10 回した後、重りを外して足踏み 10 回する
今日は久しぶりに友達とランチに行きます。髪をセットしますが、髪が薄くうまくセットできません	(髪が薄いことを想像し)姿見の前で髪をとかしてください。体験後、イメージカードを 1 枚捨ててから、テーブル 1 で次のカードを引く
車を運転していますが、最近遠方の家族が帰ってきて「車が何か所も傷ついている」と言われました。家族からは人を傷つける前に免許返納しようと言われました	あなたはどちらをどうしたいか考えて、その場で発言してください。その理由と共に、次の①か②を選んでください。 ➡①免許を返納してテーブル 2 へ、イメージカードを 1 枚捨てて ➡②免許を返納しない、イメージカードを 1 枚捨てて、テーブル 1 に残ったまま、次のカードを引く
糖尿病でインシュリン自己注射をしています。最近目が見えにくく、注射の数字が見えず間違っているかもと不安です。	ゴーグルをかけて、自己注射の単位を 16 に合わせる ➡①単位を合わせられない➡器具を付けた状態で、テーブル 1 に残り、次のカードを引く。 ➡②合わせられない➡訪問看護を利用するため器具を付けたまま、イメージカードを 1 枚捨て、テーブル 2 へ移動
看護師として働き定年退職して悠々自適の生活をしていました。白内障や難聴は人並みにあります。避難所生活をしている方へのボランティアに誘われました。バイタル測定くらいはできるかなと考え、参加することにしました。	ゴーグルと耳栓を装着してペアの血圧測定をする。その後、教員から仕事カード 1 枚もらう。体験後、器具を装着したまま、テーブル 1 で次のカードを引く
配食サービスを受けています。お刺身や生牡蠣が大好きですが、配食のメニューには全く無いので、食べられません。毎日好きなものを食べていたことが思い出されます。	あなたの大好物が長期で食べられない状態を想像しましょう。その後、イメージカードを 1 枚捨ててテーブル 2 で次のカードを引く
デイサービスに週 3 回通っています。最初あまり行きたくありませんでしたが、職員や利用者にも慣れ、次第に楽しみになってきました。この前、娘から送られたストールを付けていくと素敵と褒められ、少しウキウキしました。	教員からイメージカードを 1 枚もらう その後、テーブル 2 で次のカードを引く
あなたの最愛の人である配偶者が亡くなりました。すっかり元気がなくなり、体力がかなり落ちて日々の生活もままならないようになってしまいました。遠方の家族もとても心配して施設への入居の手続きをとってしまいました。	持ち物カードを 2 枚捨て、テーブル 3 へ移動する
排泄が間に合わず寝衣を汚すことが多くなりました。情けなくて仕方ありません。	イメージカードを 1 枚捨てる その後、テーブル 2 で次のカードを引く
脳梗塞になりました。生活機能が著しく低下し、介助が必要な状態となりました。あなたの周りには介護を担ってくれる人はいません。入院中に看護師や MSW の人から退院したらどんな風に生活したいか聞かれました。	どうしたいか考えて、その理由と共に伝えてください。その上で以下のどちらかを選びましょう。 ➡①支援を受けて自宅暮らしたい (4 点杖を使用した状態で、テーブル 2 へ移動する。) ➡②施設へ入りたい (車椅子に乗り、そのままテーブル 3 へ移動する。)

結果

1) INTO 特養にまつわる実際と課題 (表 3)

(1) プログラム開発時の苦労や工夫は、[出来事カード内容間の整合性] [高齢者に多いエピソードの引用] [多様な人生設計に配慮した内容と言葉の選択] [リアルさに向けた小道具準備] などであった。教員は、先行研究を参考にしたり、実際の体験事例から内容を考え、工夫したり、整合性を確かめたりしていた。また、リアルさやスムーズな進行に向けた準備を行っていた。

(2) 実施中の苦労や工夫は、[自己イメージの共有を目指した学生へのインタビュー方法の工夫] [現実感に向け学生の自己イメージと体験内容を関連させる声かけ] [出来事に応じた大きなリアクションの提供] [安全な体験に向けた介助者への支援] [感染予防への配慮と対策] などであった。教員は、高齢者役の学生が、自身のイメージした高齢者としての体験ができるように支援をしつつ、安全と感染予防への対策を合わせて実施していた。

(3) 学生のリフレクションでの苦労や工夫は、[場面や感情を詳細にリフレクションする支援] [学生同士での振り返りが促進される支援] [喪失体験による負の思いを吐き出す支援] [INTO 特養での体験と臨地での看護を結び付ける支援] などであった。教員は、学生による体験や感情のリフレクションを実施し、学生同士が体験を共有できるように意図的な関わりを行っていた。また、喪失体験による負の感情が強い学生には、それらの思いを吐き出させ、トラウマ体験とならないような関わり

を行っていた。加えて、INTO 特養での体験と臨地での体験や高齢者の特性などがつながるように関わっていた。

表3 INTO 特養にまつわる実際と課題

(1)「INTO 特養」プログラム開発時の苦労や工夫	(3)学生のリフレクションでの苦労や工夫
出来事カード内容間の整合性	場面や感情を詳細にリフレクションする支援
高齢者に多いエピソードの引用	喪失体験による負の思いを吐き出す支援
高齢者によく起こる病気の引用	学生同士でのリフレクションが促進される支援
性別・ジェンダーによる違和感のない出来事内容と言葉の使用	学生の体験と高齢者の個別性や特性を結び付ける支援
多様な人生設計に配慮した内容と言葉の選択	高齢者の多様性の理解を支援
リアルさに向けた小道具の準備	喪失のみの高齢者理解を防ぐ多様な意見交換の促進
不足しない物品の数の準備	INTO 特養での体験と臨地での看護を結び付ける支援
(2)「INTO 特養」実施中の苦労や工夫	(4)今後改善したい(改善が必要な)点
自己イメージの共有を目指した学生へのインタビュー方法の工夫	1 回の INTO 特養における参加人数の調整
現実感に向け学生の自己イメージと体験内容を関連させる声かけ	他プログラムとの順序性の検討
出来事に応じた大きなリアクションの提供	整合性に向けた出来事カードの吟味
介助者役割における学びを意図した声かけの実施	学生が高齢者になりきるための教員の演技力
特養入居後の体験もできるような時間、環境づくり	学生のディスカッション活発化への雰囲気づくり
安全な体験に向けた介助者への支援	学びを言語化するための支援
感染予防への配慮と対策	学生が体験と感情を詳細にリフレクションするための教員の力
	学生の体験と看護を結び付けるための教育スキル
	各教員の工夫の共有

(4) 今後改善したい (改善が必要な) 点は、[1 回の INTO 特養における参加人数の調整] [他プログラムとの順序性の検討] [学びを言語化するための支援] [学生が体験と感情を詳細にリフレクションするための教員の力] [各教員の工夫の共有] などであった。教員は、人数や順序性などの環境調整の他、教員自身の教育力の向上についても今後改善したい点として考えていた。

2) 学生の学びの内容とその理由 (表 4)

全ての教員が、「INTO 特養」は学生の学びにつながったと回答した。その内容として、学生が「他学生の意思決定場面を見ることで自分との意思決定の違いを実感していた」ことなどから [他者との比較から高齢者の多様性・個別性を考える] 学びを得ていたと感じていた。また、「リフレクションの中で、学生は体験時に選択したものと違う選択肢の存在に気づいていた」ことから [リフレクションから新たな選択肢の可能性を発見する] という学びを得ていたと感じていた。他にも学生の学びとして、[意思決定時の看護師による支援の重要性に気づく] [体験から支援内容、時期などの配慮の必要性に気づく] [体験から喪失時の心理状態に思いをはせる] が挙げられた。

INTO 特養が学生の学びにつながったと考える理由として、「学生自身の体験として高齢者の身体機能の低下や喪失感などを感じることができた」ことなどから [自分事として老いを体験していた] が挙げられた。また、[点でなく物語の中で高齢者を体験していた] ことや「単に喪失感だけではなく、今後どのように生活していきたいかや改めて自分がこれまで大切にしてきたことに思いを巡らしていた」などから [喪失後の今後の生活や大切なことを考えていた] こと、[リフレクションでの意見交換が活発であった] などが挙げられた。

表 4 学生の学びとその理由

項目	教員の回答内容
学生の学びの内容	
他者との比較から高齢者の多様性・個性を考える	他学生の意思決定場面を見ることで自分との意思決定の違いを実感していた 学生によりそれぞれ異なる意思決定を行う場面を見て、高齢者の多様性・個性の意識につなげていた
振り返りから新たな選択肢の可能性を発見する	振り返りの中で、学生は体験時に選択したものと違う選択肢の存在に気づいていた
意思決定時の看護師による支援の重要性に気づく	学生は意思決定時の看護職の関わりの重要性を述べていた
体験から支援内容、時期などの配慮の必要性に気づく	学生は体験中の教員や他学生からの声掛け内容が、自身の負の感情発生に大きな影響を与えることを体験していた 学生は自身の気づきから、他者への声掛けの内容が相手に大きな影響を与えることに気づいた 他者への声掛けの内容や時期を考える必要性に気づいた
体験から喪失時の心理状態に思いをはせる	自身の喪失体験から、喪失時には新たな楽しみに目を向ける余裕がない可能性という心理状態に気づいた
学生の学びにつながったと考える理由	
これまでの知識も踏まえ高齢者になりきっていた	ゲーム中では高齢者である自分になりきって、ずっと演技していた これまで高齢者との関わりの体験から、その時の高齢者の反応を想起して思考を深めることができていた。
自分事として老いを体験していた	学生自身の体験として高齢者の身体機能の低下や喪失感などを感じることができた 自分事として捉えたため特に心理的な側面の理解へつながった 老いが自分事になった
点でなく物語の中で高齢者を体験していた	学生は点でなく物語の中で高齢者体験をすることができた
喪失後の今後の生活や大切なことを考えていた	単に喪失感だけではなく、今後どのように生活していきたいかや改めて自分がこれまで大切にしてきたことに思いを巡らしていた 自身の体験から提供されたい、提供したい看護につなげて考えていた
振り返りでの意見交換が活発であった	学生自身の体験であるため、意見交換が活発だった

考察

1) コロナ禍が促進した INTO 特養の教育効果

教員は、学生が高齢者になりきり〔自分事として老いを体験していた〕中で、学生は〔点でなく物語の中で高齢者を体験していた〕〔意思決定時の看護師による支援の重要性に気づく〕ことができていた、と学生の学びを評価していた。また、「自身の体験から提供されたい、提供したい看護につなげて考えていた」などから〔喪失後の今後の生活や大切なことを考えていた〕という教育成果の手ごたえを感じていた。学生の多くは 20 歳代であり、身体的不自由や人生経験が少ない場合も多く、そのような学生が高齢者の思いを理解することは難しい。しかし、教員は INTO 特養実施中やリフレクションにおいて、学生が感情を表現する様子や意見交換の活発さと内容などから手ごたえを感じていた。学生は、「INTO 特養」において、高齢者である自分の物語を体験し、その時々で生じた感情から、高齢者もまた、個別的な体験と感情を持つということを知覚した可能性がある。これは高齢者観、高齢者看護観の拡大への体験と考えられ、教員が感じた手ごたえだと推察できる。また、このような手ごたえは、実習目標や「INTO 特養」のねらいへの到達を評価する教員の根拠にもなっていた。

学生がこのような体験ができた要因の一つとして、各段階での教員の工夫が考えられる。教員は多くの高齢者が体験する可能性のある内容を出来事カードとして準備した。また、学生が、関節の拘縮や重だるさ、目の見えにくさ、他者へ依存せざるを得ない状態などを体験できるように、出来事内容、指示内容を工夫した。加えて、本人の選択ができる体験や周囲により決められてしまったことでの憤りの体験などに対して、体験中のその時々で生じた感情が表現されるようにリフレクションを行った。このような工夫や丁寧なリフレクションにより、学生は体験中の感情を思い出し、その時々で場面と感情を自身の言葉で語り、また、グループメンバーの思いを聞き、自身の感情と比較したり、納得したり、新たな発見をしたりすることができたのだと考える。

このようなシミュレーションゲームの効果は、これまでも何件か報告がみられた [4] [5]。従って、

綿密な準備と教員の学生をその気にさせる運営があれば [6] 学生自身に起こる老いとして、様々な感情を体験し老年期を生きること、そして必要な援助を考えるためには効果があることは予測できた。しかし、「多くの時間と人手及び物品が必要で、必ずしも効率的な方法ではない」 [5] とあるように、全国においても、1990年代からこれまでの実施報告は数件にとどまっている。そのため、本学においても、構想はあったものの実施には至らなかった。それは、準備の大変さはもとより、学生をどの様にプログラムに配置するかが課題であった。

今回、1回のゲームは、4名～8名で行った。この人数だからこそ、教員は一人一人の状況を丁寧に紹介したり、学生の設定に合わせたリアクションをとったりすることができた。また、リフレクションもじっくり行うことができた。これらは、実習の1グループが4～5名であり、各グループが臨地実習、学内実習、オンラインを活用した実習を前後させながら取り組んでおり、学内実習プログラムの一つである「INTO 特養」も、1日に1～2グループで取り組むことができたためである。授業では時間が限られており、1～2コマの演習の中で100名の学生をプログラムに効果的に入れ込むことは難しい。そのため、ゲームによる効果を理解していてもこれまで実施できていなかった。奇しくも、今回、コロナ禍が本学におけるこのプログラムの実施を促進させてくれたといえる。

2) 課題と今後の発展

課題の一つとして〔学びを言語化するための支援〕〔学生が体験と感情を詳細にリフレクションするための教員の力〕のように、学生のリフレクションと表出を促す教員の能力の拡大があげられた。リフレクションとは、様々な定義はあるが、本プログラム内で求めるリフレクションは、「経験により引き起こされた気にかかる問題に対する内的な吟味および探求の過程であり、それらを通して自己に対する意味づけを行ったり、意味を明らかにしたりするものであり、結果として物の見方や考え方に変化をもたらすもの」 [7] である。経験をリフレクションすることで、看護観や高齢者観が拡大され、看護の質・内容の向上につながり得る。しかし、学生の経験を意味あるものにするためには、学習者のオープンさや意欲、積極的参加を促進していく教育者のあり方も重要になる [8]。また、学習者の心理的かつ情緒的状态、および学習者を取り巻く環境が影響するため、教育者にはリフレクションを促進するための学習環境を整備することが求められる。

二つ目の課題として、各教員の工夫は必ずしも共有されていないことも明らかになった。今後は各教員の工夫を共有していくことで、さらに良いプログラムにしていくことが必要である。今回、教員が捉えた、学生の様子を振り返った内容からは、対象特性実習の目標 1) 【看護の役割や機能についての理解】や 2) 【施設で生活をしている高齢者とその家族についての理解】につながったことが推測できた。これらから、本プログラムの内容・方法は高齢者という対象特性を捉えるうえで意義があったと考える。しかし、学生の視点から、どのような学びであったのかは今回明らかにしていない。今後は学生の記録等から学びの内容を分析し今後の発展に向けた修正が必要である。

Acknowledgment

本稿は、第26回老年看護学会学術集会で発表した内容について再検討したものである。開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

- [1] 太田喜久子, 老年看護方法論の確立を目指して. 老年看護学, 2003.7 (2) :p.4 - 8.
- [2] 大谷英子, 松本光子, 老人イメージと形成要因に関する調査研究 (1) 大学生の老人イメージと生活経験の関連. 日本看護研究学会誌, 1995.18 (4) :p.25 - 37.
- [3] 佐藤弘美, 正木治恵, 永江美千代ら, 老年期を生きること理解するためのシミュレーションゲームの効果について. 千葉大学看護学部紀要, 1993.15:p.155 - 159
- [4] 前掲 [3]
- [5] 西尾和子, 老年者を理解するシミュレーションゲームの実際と効果. 日本看護医療学会雑誌, 2000.2 (2) :p.47 - 53
- [6] 佐藤弘美, 佐藤理, 善き看護 佐藤弘美 Last Not. クオリティケア, 2008:p.32 - 44

Miyagi University Research Journal

[7] Boyd EM, Fales AW, Reflective Learning, Key to learning from experience. *Journal of Humanistic Psychology*, 1983.23 (2) :p.99 - 117

[8] 田村由美, 池西悦子, 看護の教育・実践に活かすリフレクション. 南江堂, 2020.p.24